

第 29 回知床五湖登録引率者審査部会 議事概要

日時：平成 30 年 11 月 21 日（水）15:00～16:30

場所：ウトロ漁村センター 2 階会議室

出席：竹原・笠井（環境省）、大道（北海道）、増田・玉置（斜里町）、喜来（知床斜里町観光協会）、桑島（ウトロ自治会）、古坂（自然公園財団）、若月・岩山（登録引率者代表）、笠井（知床ガイド協議会）、秋葉・葛西（知床財団）

概要：

今年度の制度運用結果と新規及び既存登録引率者研修の実施結果が報告され、登録試験結果が承認された。また既存登録引率者の研修カリキュラムや登録試験の受験資格や登録フロー、当日受付カウンターのあり方について議論がなされ、今後それぞれの課題や要点などを整理した上で次回の審査部会で引き続き議論することとした。

1) 平成 30 年度 登録引率者研修及び試験の結果について（●：意見、✓：まとめ）

資料 1-1 新規養成者、既存の登録引率者研修の実施状況について〈知床財団／金川〉

本年度の各種研修の実施状況について説明。

既存の登録引率者研修について

- 今年度はツアー中のヒグマ遭遇事例がかつてないペースで多発したため、通常 2 回のケーススタディミーティング（以下、CSM）に加え、臨時の CSM（任意）を実施した。（増田）
- 研修欠席者 3 名の内訳として、2 名は引退による自主的な欠席、1 名は私的な海外登山のための欠席であり、代替研修は認めないこととした。（竹原）
- また、代替研修を認めて救済した 1 名については、自身が保持するガイド資格の移行のための研修参加を理由とした欠席であり、ガイド資格の保持が新規募集の応募要件でもあり、引率者に求められる資質であるとの事務局判断から、代替研修を認めた。（竹原）
- 研修欠席時に代替研修による救済が可能なケースについて、不透明である。過去事例等を参考にガイドラインとして明文化してほしい。（若月）
- 救済の基準は公平性の観点からも重要。現段階において基準が明文化されたものはない。過去の事例も含めて運用マニュアル等に整理反映し、既存引率者に周知するべきだと考える。一方、明文化によって欠席事由の判断がより厳密に限定されてしまうことが懸念されるため、個別に協議が必要となる事案が出ることを想定した内容にすること

が望ましい。（秋葉）

- 現行の研修と試験の登録フローにおいて、当該年度の研修出席が次年度の登録試験の受験資格となっている点に矛盾を感じる。従前から改善を求める意見が出ている。（笠井）
- 登録フローの運用について過年度から誤りや認識の違いがあり、整理を要望してきた。審査部会場で議論すべき内容である。（若月）
- ✓ 研修欠席時の取り扱いについては、過去の事例を参考に判断基準を整理し、次回の審査部会で事務局案を示し、協議する。（増田）
- ✓ 登録フローの整理・改善については、次回の審査部会で改善案を示したい。（増田）

引率者研修の開催日程について

- シーズン中、シーズン後研修は現在、2 日間の連続で開催され、いずれか 1 日の参加が必須となっているが、現行の日程では葬儀等があった場合に受講できない可能性がある。開催日の間隔を開けるよう要望する。（笠井・岩山）
- 引率者研修は、登録の必須要件であることから、日程調整は可能な限り参加の支障がない調整がなされるべき。不連続の 2 日間で実施する案は良いと思うが、変更した結果、不利益を被る引率者が発生する恐れもある。要望が引率者の総意であるという点を確認頂きたい。（秋葉）
- ✓ 本件を持ち帰り、引率者間の意見をまとめることとする。（若月）
- ✓ 引率者の意向を確認した上で、来年度の研修日程を次回の審査部会に提案する。（増田）

救急救命講習について

- 有効期限内の救命資格保持が登録試験の受験資格になっているが、試験日までに更新時期が合わないことがあり少し不便である。（若月）
- 救命資格は試験の要件というよりは引率の要件である。引率開始日までに資格取得が間に合えば問題はないので、受験資格についてもそのように整理を進めるべきである。（秋葉）
- ✓ 救命資格の確認タイミングについて整理し、次回の審査部会で案を示すこととする。（増田）

今後のスケジュールについて

- ✓ 研修カリキュラムも含め制度全体の課題を洗い出し、次回の審査部会以降も議論を継続したいと考えている。仮に次回の審査部会やあり方協議会にて登録フロー変更等の合意がなされた場合においても、変更が反映されるのは最速で 2020 年度、といったスケジュールとなる。（竹原）
- ✓ 今年度は知床財団が受託事業の一部において、引率者研修の管理や運営における改善案の提案を行う予定である。各案件における課題や要望、意見等を集約し、同業務の一環として次回の審査部会までに整理していくこととしたい。（竹原）

- ✓ 法の下での運用であることから、ルールや制度の変更については、ある程度時間を要するという側面がある。また、頻繁に変更を行うのが困難であるという点にも留意し、混乱が生じないように調整しながら検討を継続する。（増田）

資料 1-2 登録試験の結果について〈知床財団／金川〉

筆記及び実地の登録試験の実施状況と結果について説明。内容確認の上承認。

2) 平成 30 年度 ヒグマ活動期の運用結果について（●：意見、✓：まとめ）

資料 2-1 平成 30 年度 知床五湖利用調整地区制度の運用結果について（速報）

資料 2-2 平成 30 年度 ヒグマ活動期の運用結果について（詳細）〈知床財団／金川〉

今年度の五湖利用調整地区制度通期及びヒグマ活動期の運用結果について報告。小ループ・当日受付カウンター事業の運営状況や課題について説明。

外国人の利用状況について

- 利用制度を知らずに来訪した利用者への対応措置として当日受付カウンター事業が発足した経緯があったが、現場の認識としてヒグマ活動期の制度は外国人利用者に浸透してきているか。（若月）
- データ上、外国人利用者のガイドツアーの事前予約の割合は増えている。一方、外国人利用者の絶対数が増加しているため、制度説明や当日受付のコストは減少しておらず、現場の対応は増えている印象である。（秋葉）

小ループツアーについて

- 小ループツアーを担う有志の登録引率者が年々減少しているという課題がある。小ループツアーは人気もあり地域の要望であると認識しているが、当番引率者の調整には時間も労力もかかるため運営は非常に厳しい状況であるということをお場で共有させていただく。（若月）

資料 2-3. 平成 30 年度 当日受付カウンター事業の結果について〈ガイド協議会／笠井〉

事業の運営状況と今後のあり方について

- 現在、ガイド協議会からの事業受託という形で知床財団が当日受付カウンターの現場対応を担当している。委託費だけで運営するのは厳しいが、制度がある以上どこかが事業所と利用者の調整機能を担わなければならない。（秋葉）
- 本来ならば「知床五湖のヒグマ活動期」のみならず、一年を通じてガイドの紹介や斡旋サービスを行うのが理想だが、現在地域にその機能は無く、地域全体の課題との認識である。（秋葉）
- 知床五湖の制度発足以前から知床のガイド事業は個々のガイド事業所の営業努力で培

ってきた実績がある。当日受付カウンターのような総合窓口があれば各事業所にとって有益である反面、事業所間での競争原理が働かなくなるのではという危惧もある。

（若月）

- 現状は相互のバランスを取り紹介手数料を支払っているが、当日受付カウンターはガイド事業所からの要望で出来たわけではないという経緯をご理解いただきたい。（若月）
- 運営側の人件費や来年度の増税を考えると、当日受付ガイドツアー料金を値上げせざるを得ないのではないかと。（岩山）
- ✓ 事業内容の修正や廃止はあり方協議会に承認を得る必要がある。ガイド協議会には、来年度の事業計画案を次回の審査部会に提案いただきたい。（増田）

3) 平成 30 年度 春期利用適正化計画改定実験の結果について（●：意見、✓：まとめ）

資料 3 平成 30 年度春期利用適正化実験の実施結果について〈知床財団／江口〉

春期利用適正化計画改定実験の結果について報告。実験 3 年目となる来年度も継続して実施する方針を確認。

アンケート結果について

- ガイドツアー非参加者のアンケート結果はどうか。制度を考える上で大切なのは知床来訪者の満足度や地域への利点を併せて検討することだ。実験 3 年目はそういった観点からもリサーチを行ってほしい。（若月）
- 利用者側の視点も大切だが、管理者側としては安定した運用を続けることも重要である。ヒグマと天候は予測不能であり春期利用の難しさでもある。3 年間の実験は様々な要素を検証するためである。（増田）
- 利用者の支持態度や利用上のメリットは制度改定における重要な判断基準である。ガイドツアー非参加者の支持態度は 5 割程度で高いとは言えない。ここ 2 年間は過去にない寡雪傾向であり、実験条件として望ましいと言えない状況だった。（秋葉）
- 春期の知床五湖散策において利用者が重視する要素の優先度をマーケティング的な手法で調査した。地上遊歩道の利用者は、「利用ルール（ガイド/レクチャー）」より「散策コース」を重視しており、費用についても 5 湖一周コースへの支払い意思額が最も高い。大ループのニーズは高いという結果だ。（秋葉）

春期利用について

- 春期は残雪による遊歩道の踏み抜き事故が懸念されるため、大ループを開放しないという経緯があった。この時期に大ループを利用するのであれば、引率者付の限定利用が条件となる。（古坂）
- 小ループは個人散策を可能とし、大ループはガイドツアー限定利用という実験の形式で春期の運用を継続するのはいかがか。（若月）

- 現在の春期ガイドツアー運用はあくまでも実証実験の位置づけである。利用者にとっては選択肢が増えるという利点があるが、改定においては制度全体のわかりやすさという点も重要である。（竹原）

今後のスケジュールについて

- ✓ 来年度の実験は次回審査部会で実施案を提案し、次回のあり方協議会での承認を経て実施したい。（増田）
- ✓ 利用適正化計画改定のスケジュール・手続については、秋期の取り扱いも含め次回の審査部会、あり方協議会で詳細をお示ししたい。（増田）

4) その他（●：意見、✓：まとめ）

北海道主催インバウンド対策研修会の実施（案内）について

- 道の自主事業と理解している。内容や講師は、地域やガイドの課題や興味に合致するように調整いただけるとありがたい。参加者も自ずと集まると思う。（秋葉）
- ✓ 今年度は12月と2月の2回、研修を予定している。2回目の研修は皆さんの要望を随時反映していきたい。（大道）

以上